

戦中期の「皇恩」とハンセン病者の文芸―序説

“Ko-on (Imperial obligations)” and Literature of Hansen’s disease patients during World War II

大内 郁

1 はじめに

戦前・戦中のハンセン病療養所内で文芸活動が盛んに行われた背景には、もともとそれらは患者自身の各々の自由な取り組みであるという側面と共に、1930年代頃から日本政府が隔離政策を拡大する中で、制度的に療養所内の「慰安」として文芸活動が奨励され始めるといふ、ある種の政策的側面があるといえる。昭和11年に全生病院の北條民雄が小説『いのちの初夜』で雑誌「文学界」の文学界賞を受賞し、昭和12年には改造社が募集した「新万葉集」に入選した長島愛生園の明石海人の短歌が評判になるなど、昭和10年代初頭に相次いでハンセン病を患い療養所に生活する表現者の存在が社会的に顕かになったが、これらの背景に、そういった両側面に関わりながら患者たちの間で短歌、俳句、詩や小説の書き手が少なからず存在し、各療養所がそれぞれに月刊の文芸機関雑誌を発行しているという状況があったといえる。

当時マスメディアでは、北條や明石などの作品がセンセーショナルに「癩文学¹」という名称で語られたことは知られている。実際のところ、その「癩文学」というものに対する社会的注目の最大の要因が、川端康成を介して鮮烈な文壇へのデビューを飾った北條民雄の文学が放つ力であったことは間違いないが²、この「癩文学」という言葉は北條がもっとも嫌ったものでもあった。昭和12年の暮れ、早すぎる死の前に書いた短文でも、その「癩文学」というカテゴリーへの不快感をあらわにして「我々の書くものを癩文学と呼ぼうが、療養所文学と呼ぼうが、それは人々の勝手だ。私はただ人間を書きたいと思っているのだ。癩など、単に、人間を書く上に於ける一つの『場合』に過ぎぬ³」と触れている。独立した一個の作家として、近代的な人間探究としての「文学」を追求していた北條が、世間の「癩文学」や「療養所文学」という分類に興味を抱かないのは自然なことである。しかし、恐らく興味を抱かないという以上に、北條は「癩文学」という言葉を批判し、嫌悪していたともいえるのだ。

北條は同じ文中で次のようにも語る。「癩運動が癩者のためのみのものであるなどとは、夢あまたれる勿れ⁴」。ここで言われる癩運動とは、1931年以後の国内の全患者隔離を目的とした政策にまつわる全ての「救癩」のムーブメントを意味すると考えられるが、療養所

¹ 「癩文学」とは何かという議論が当時盛んになされている。昭和13年話題となった長島愛生園の医師小川正子が自らの「救癩」の旅を綴った『小川の春』出版後、マスメディアはそれをも「癩文学」と呼びさらに混迷した。川端康成が「人々が言ふのも、癩者が書いた文学とか、癩を書いた文学とか、ただそれだけの軽い意味であらう、「癩文学」と呼ぶ特殊なものがあるわけではない。」と述べるような受け止め方にならざるを得なかった。しかし一方でこの「癩文学」は、北條民雄と同時期に全生病院内での文芸活動の中心的存在であった麓花冷によると、そもそも患者自身が「我々の文学」という意味で使い始めたものだといふ。(麓「我等の文学」『科学ペン』昭和13年3月号 pp.98-100 他) この意味では、ある種のマイノリティの自覚の姿としても新たに注目すべきだ。アイデンティティとしての「癩文学」の問題への指摘としては、Susan L. Burns *Making Illness into Identity: Writing "Leprosy Literature" in Modern Japan* :Japan Review, 2004, 16 pp.191-211 などもある。

² 北條の『いのちの初夜』が当時、一際特異な力を発揮していたことについては、中谷美紀「北條民雄とハンセン病文学（癩文学）——一九三〇年代における「いのちの初夜」の特異性——」『阪神近代文学研究 第六号』（2005年5月）などがある。

³ 北條民雄「頃日雑記」『科学ペン』昭和13年3月号に掲載。北條民雄『定本北條民雄全集下』創元社1996 p.138

⁴ 北條民雄前掲書 p.139

内の文芸奨励も、実はこの一貫にあるものだ。つまり、そのように考えた時、ここで北條の言葉は、「癩文学が癩者のためのみのものであるなどとは、夢あまたれる勿れ」という皮肉としても読み取れるわけである。彼の「癩文学」への嫌悪と批判は、単に自らの文学が「癩」と烙印され、カテゴライズされるということに対して向けられたのではなく、その「癩文学」というセンセーションが誰によって何のために使われているのかという批判的観点があったといえるだろう。

北條文学の第一の理解者であった川端康成が北條の死に際して語った言葉に次のような部分がある。

社会はいよいよ大きいもののために自己を棄てることを求めつつあつて、しかも翻つて思へば、文学に献身することの真実を、知らず識らずのうちに、欺き奪ひ去らんとしつつある時北條君などを思つてみるのも無駄ではなからう⁵。

まさに、時代は「大日本帝国」のための文学・芸術という要求に多くの作家たちを巻きこんでいく状況にある中で、あくまで自己の苦しみ执着し「文学」を続けようとしたハンセン病患者の北條が思い浮かべられているわけである。

しかしながら、実際にはそのような時代を「先取り」するかのように、療養所という政体に対峙させられる状況にあったのが「癩文学」だったともいえるのではないだろうか。北條の言葉を手がかりにすることで、ハンセン病療養所における「大きいもの」の存在と、「癩文学」にまつわる一つの政治的問題が姿を現すといえるだろう。ここで考えたいのは、近代日本のハンセン病療養所が、国家的な最大権威である「皇室」の「恩」をうたい、それをそこに生活する人々に背負わせるものであったということである。そういった戦前・戦中のハンセン病政策において、人々の「表現活動」がどのようにありえたのか、概観的ではあるが、「皇恩」というイデオロギーの構造的な組み込みと、そこへの精神的な求心に注目したい。

2 隔離政策と「皇恩」－研究の背景として

まず、近年の2005年、ハンセン病問題研究に関わる研究者らによって「ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書」がまとめられた。そこで検証された、戦前・戦中期のハンセン病隔離政策における皇室や皇室主義の関わりを確認してみたい。

報告書では、戦前のハンセン病政策が、皇室からの「下賜金」による「癩予防協会」の設立や、また「貞明皇后」や彼女の詠んだ「御歌」が「救癩」シンボルとして機能したという特徴に触れている。具体的には次のようなものだ。①、「癩予防協会」は、1931年3月に、絶対隔離政策を支持する世論作りのために、大正天皇の後、貞明皇太后節子が深く関わり設立されたものであり、ハンセン病医療のために出された節子の「下賜金」25万円の内の10万円が協会設立の基金とされている。皇太后節子の関わりは世論形成に大きな意味を持った⁶。②、「癩予防協会」は、1932年に皇太后節子の誕生日である6月25日を「癩

⁵ 川端康成「北條民雄と癩文学」『科学ペン』昭和13年3月号 pp.88-89

⁶ 癩予防協会の設立以後、「絶対隔離政策」と「癩予防協会」とが一心同体の関係にあった事実について、藤野豊氏の説明は明解である。ハンセン病患者はすべて隔離するという方針を国民に定着させるためにも世論づくりが必要であり、それまで自宅療養していたような患者も包括するきめ細かい監視体制も必要となった時にその役目を担ったのが癩予防協会であったという。当時の内務省は、官僚と国民との間の一種のパイプ役となる半官半民団体を設立し、第三者的立場をよそおいつつ内務省の政策の国民への浸透に機能させるための団体として癩予防協会を設立したのだと、藤野氏は見ている。－藤野豊『いの

予防デー」と定め「癩撲滅」「絶対隔離推進」の世論喚起の取り組みを始め、皇太后節子が「癩患者を慰めて」と題して歌を詠んだ日に因み、11月10日を「御恵みの日」と定め「我々国民として最も尊ぶ皇室皇太后陛下が日本で一番虐げられて居る、踏みにじられている癩患者に御手を下し給ふた」として、ハンセン病政策の中で皇室の慈愛が強調されていた。⁷ ③、②でも触れた皇太后節子が1932年の大宮御所の歌会で「癩患者を慰めて」と題して詠んだ歌「つれづれの友となりても慰めよ 行くことかたきわれにかはりて」の歌碑が、私立を含めて、ほぼ全ての療養所に存在しており、戦前・戦後を通じてハンセン病医療・政策における皇室の存在の大きさについて物語る。等の点が挙げられている⁷。

このように、最高権威としての皇室が、ハンセン病政策の実質的な財源への関与や「隔離」と「撲滅」の世論喚起への貢献をし、また貞明皇太后節子の「つれづれの友となりても…」の御歌がハンセン病医療・政策に象徴的に用いられることを通じて、そこに関与する患者や医療者ら総体的な人々の精神的支柱としても関わっていたと考えられている⁸。

この癩予防協会が1931年（昭和6）内務省衛生局の外郭団体として設立された同年に、「癩予防法」が成立する。国の政策としては既に、1907年（明治40）「癩予防ニ関スル件」の法制定以後、全国を5区に分けた道府県連立のハンセン病隔離政策が開始されている。しかし、1931年の「癩予防法」制定により、その規模が拡大されることになり、新たに患者の療養所への入所費等に扶助制度が取り入れられて、日本国内のハンセン病全患者の収容を目的とした「絶対隔離政策」が開始される。この1931年には、戦前・戦後のハンセン病隔離政策において、官僚や政界との繋がりを深くもち実質的に強大な権威をもった医師光田健輔が、家族主義の「理想郷」と称して自ら所長に赴任する、国立の療養所「長島愛生園」の開設もある。既に多くの研究が示してきたように、近代日本のハンセン病隔離政策は「病者」を排除する民族優生を志向した「民族浄化」の思想が反映された⁹ものであるが、さらに日本的なあり方を特徴的に考えるべき点として、そこに「皇室」の権威的介入があることで、ある種の国家への「包摂」に結びつきながら「絶対隔離政策」が支えられたということがわかる。

このような「皇室主義」を中心に据えた隔離療養所の成立と共に、「文芸」の問題も決して例外ではなく、それらの影響下にあると考えることができるだろう。患者の「文芸」を「皇恩」の下で回収していくような言論として、次のようなものが浮かびあがってくる。隔離政策の当事者、当時の内務省衛生局予防課長としてハンセン病絶対隔離政策推進に第一人者として携わった高野六郎が昭和10年に『医事衛生』という専門雑誌に載せた文章から言葉をひいてみよう。

此の御歌に感泣した患者は思はず涙の目を伏せて、「今にして知る御心にあらねども御歌よみつゝ涙新たなり」と奉答の歌を作るのである。此の感激が療養所内の患者全部の胸を涵して、療養所文学が生長する。／近頃では患者の多くの者が文藝の何かに携はるやうな傾向を示して居る。何れの療養所にも月刊雑誌があつて、各種の作品を発表して居る。

ち」の近代史―「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』（かもがわ出版2001）p.131

⁷ 「ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書」（2005年3月）p.436-437

⁸ このハンセン病政策を、政府・皇室側の思惑から読み解き、それが格好の「慈善恩賞の府」のプロパガンダとして機能している側面も言及されている。片野真佐子氏によると、皇室を慈善恩賞の府、とりわけ慈善の府となし、皇恩の広大さを目に見えるかたちで国民に知らしめるもっとも有効な事業として「救癩」事業は選ばれたとして次のように論じる。「西洋社会に対する文明国家としての国家の体面を保つ意味ももちながら、憐れな慈善の対象に救済の手を差し伸べる皇室の恩愛は大きく喧伝されることになる。この節子皇太后が支援するとすれば、光明皇后の故事に照らしても、これほどの適役はあるまい。理の当然として、同情が翕然として集まる。」片野真佐子『皇后の近代』講談社メチエ p166-168

⁹ 藤野前掲書などに詳しい。

或は短歌、俳句、児童文藝等の独立機関を持つたものさへある。将来日本の文藝は癩患者が指導するかも知れぬなどゝ元気のよいことを云ふものもある。誠に結構な次第で、癩患者の慰安としては是以上のものはあるまい。患者が文藝に精進して幾何でも病苦を忘れることが出来たならば「つれづれの」御歌を御下賜になつた皇太后陛下にも嘸かし御満足に思召されることであらうと思ふ。

近頃、療養所へ行くと、恩賜の楓がすくゝと伸びて居る傍らに皇太后陛下の御歌の歌碑が立てられて居る光景を屢々目撃する。甚だ畏多いことではあるが、日本の癩患者は皇太后陛下の御仁慈を中心として生活して居るのである。患者達は毎日御歌を拝誦しては感涙にむせびつゝ、恩賜の楓の緑蔭の、年毎に濃くなり行くのを楽しみにして居る。其の和かな気持を益々伸ばしてやることは、癩事業関係者の責任であり、且つ国民の責任であると思ふ。／我等は皇太后陛下の御事業として一日も速に癩根絶計画を完成したい。癩の国策は「つれづれの」の御歌によって定められて居る¹⁰。(傍線大内)

患者の「文芸」が、「皇恩」を象徴する「御歌」への奉答の歌として捉えられていることは特徴的である。奏答の歌を作る感激がさらに、「患者の胸を涵して、療養所文学が生長する」というように、何にせよ全てが「皇恩」の下に回収されていく発言である。ここでは患者たちは、いたいけな子どもの姿として捉えられているようにも感じられる。さらには、結局それらの「文芸」は、「皇太后陛下の御事業として」の「癩根絶の完成」という目的を遂行するためのものとして捉えられていることも明白である。このように、いわゆる療養所内の文芸活動は一方で文化的な皇室を誇示しつつ、他方確実に隔離政策の遂行に関わらせて論じられるものとなる。

3 療養所文芸における「皇室主義」一構造的問題として

次に、そのような「皇室主義」とでもいうべき状況が患者たちの文芸活動に実際どのような接点を持ち、影響を与える可能性を持っていたかを考えてみたい。

昭和初期から10年頃までに各地の療養所でそれぞれ独自の文芸雑誌が発刊され、大正期から続く療養所内の患者による文芸活動が療養所外へと社会化しようとする時期を迎えていた。療養所内の文芸活動は、もともと入所者によって自然的に始まったものであるという認識が一般的になされており、明治40年より各地で設立されはじめたハンセン病療養所ではその開設2、3年の間から患者内で俳句や短歌の会ができていたという¹¹。しかし、そのような療養所の生活における素朴な楽しみは、昭和初期から療養所内の意義深い「慰安」として意味づけられつつ、「皇恩」による「救癩」と「絶対隔離」の社会的喧伝に組みこまれていったといえるだろう。

そのような変化の一側面を、東京東村山の多磨全生園（発刊当時は全生病院）で最も古く療養者によって刊行されていた療養所内文芸雑誌『山桜』が、発行元を患者同人としての山桜倶楽部から療養所側の全生互惠会に移した場面で考えてみたい。昭和5年に、全生病院では療養所内整備で全生互惠会というものが設立される。この新たな機関は、当時の光田健輔院長が設立の発起人となり、皇室からの下賜金が財源となって作られたものである。この機関に組み込まれることにより、『山桜』はそれまでの同人誌から療養所の機関紙として成立する。

¹⁰ 高野六郎「夏は緑の木陰」『医事衛生』昭和10年7月31日号 p.838

¹¹ 大正期頃の文芸活動については、『俱会一処 患者が語る全生園七十年』（多磨全生園患者自治会 一光社1979）p.62

■全生病院文芸誌『山桜』の動き

大正8年4月 第一号発刊 発行：山桜倶楽部（患者による文芸同人誌）

昭和4年1月 謄写版から活版印刷に

昭和5年7月 全生互惠会（会長以下役員に職員が就任 会長＝所長）が設立され、機関紙『山桜』発行が、山桜倶楽部から「全生互惠会出版部」に移管

もともと全生病院内で患者らによる編集・印刷作業で発刊された『山桜』誌は、昭和5年に発行元を職員の管轄下である全生互惠会に移している。さらに、下記の全生互惠会の事業要項をみると、まず第一項として「一大家族主義に立脚し」等の文言が見られ、「皇恩」に報いる皇民家族主義としての理念を掲げている様子が窺える。また、第五項「印刷出版及学藝の奨励」では、奨励されるべき文芸に一定の注文があるように読み取れる文言がある。「外部に対しては院内の平和なる生活を記述し、社会の同情と理解を得るに努め以て癩の予防宣伝に資する所有らんとす。」という部分だ。ここには、つまるところ「癩予防協会」の事業との関連性が見出せるだろう¹²。

■財団法人全生互惠会（昭和5年7月設立）

＜財団法人全生互惠会事業要項＞

第一項 相互扶助作業の奨励及援助

本院は開院当初より一大家族主義に立脚し、相互扶助精神の涵養に努めし結果、現在千有余名の患者は恰も一 가족の如く身は悲惨極りなき病魔と闘ひつゝ、家族の一員として重病者の看護に、或は公益事業に、或は精神修養に関する種々なる事業に従事せり。然れども病重きに至れば多年功績顕著なりしものと雖も、之を慰安扶助するの資に乏しく為に病床に悶々として生を終るものあり。本会は斯くの如き功労者に対し社会にある恩給制度に準ず可きものを設け聊かながら、其の功績を推賞し、以て将来此の種の事業に従事するものを奨励援助し、他面相互扶助精神の向上に努め以て 皇太后陛下の優渥なる恩召に副ひ奉り、兼て本院をして理想的療養所たらしめんことを期するなり。（傍線大内）

...

第五項 印刷出版及学藝の奨励

本会は山桜、芽生、等数種の月刊雑誌及パンフレットを発行し、以て院内患者の文藝に依る慰安、並に精神的向上を計り、外部に対しては院内の平和なる生活を記述し、社会の同情と理解を得るに努め以て癩の予防宣伝に資する所有らんとす。¹³

一方、患者側からどのような反応が示されているかを考える必要もあるだろう。次に挙げるのは、この全生互惠会への移管後初の『山桜』誌の巻頭言である。この号の巻頭言には署名はないが、印刷・編集に携わっている出版部の患者部員によるものであると考えられる。

¹² 昭和8年頃からは癩予防協会が療養所患者から「映画素材集」の募集を行なっていることが知られている。山下道輔・荒井裕樹『ハンセン病文学資料拾遺』（国立療養所多磨全生園自治会ハンセン病図書館2004）第一巻解説において「同協会は療養所の宣伝のため患者たちの文学活動を相当重視していた」との見解が示されている。さらに、癩予防協会の文学戦略について、荒井裕樹「隔離する文学—『癩予防協会』の文学戦略—」『昭和文学研究』第50集（2005年3月）が詳細に研究をすすめている。

¹³ 『山桜』昭和5年7月号 pp.2-4

■『山桜』昭和5年7月号 「巻頭言」

「療養所をして吾等の最もよき楽園に

これは吾等の切なる念願であり、吾等は今相扶け、相労りつつ、その楽園建設に懸命努力しつつある。そは単に吾等現在千名の為のみならず、臆て入園し来る幾百千のまだ療養所を知らずして悲嘆の日々を送りつつある者への為でもある。斯くすることは吾等が当然なすべき国家社会に対する報恩であり、又吾等に与へられたる使命であると確信する。

今吾等多年の宿願が多くの同情者の援助に依り達成し全生互惠会として此処に設立さる、何たる幸ぞ

而も此の互惠会の基礎は申すも畏し昨年十一月十日 皇太后陛下の御仁慈に依る御下賜金にして実に光榮限りなきものなり。

吾が全生村創立されて既に二十三ヶ年、一貫する愛互の精神は益々高潮し、曾ての懊悩と、自暴自棄は、感謝と法悦に変わり、而して相互扶助作業に、諸種の生産にと進展しつつあるを思ふ時、いかで外なる涙の同胞を見過さるべき

吾が全生互惠会は

一に吾等の生活を精神的に物質的に堅実なものとすると共に、

一に外なる同胞を呼び招ぐ、所謂癩予防救済の現実化運動でもある。

希ふ 本記念号出版の所以を御諒察の上吾等の念願完成に御声援を賜らんことを。

¹⁴ (傍線大内)

療養所の文芸奨励の一貫として、「皇恩」による「救癩」と「絶対隔離」の喧伝が組み込まれていたことは明白であり¹⁵、同時に患者側にも主体的にそれを担っていかうとしている姿が見出せる。「救癩」事業に絶えず包摂されうる「表現」が、このように構造的に作り上げられようとしていたといえる。

4 描かれた患者の精神—「皇恩」へ報いる

ここに一つの作品を挙げてみたい。昭和18年(1943年)の『山桜』10月文芸特集号で阿部知二が選者になり入選佳作となっている『南へ—御歌 海を渡る日』という作品である。これは、林八郎という、昭和18—19年という戦時末期の時期に全生病院の『山桜』出版部で中心的に文芸活動に関わっていた人物による短編小説の作品である。

この作品を挙げた理由は、当時の患者たちのもった「救癩」やそれを包括する「皇恩」への精神的な高揚が、ある種の記録的な側面を持ちながら描かれているからだ。まず、大まかなストーリーを説明したい。

療養所の出版部でリーダー格として働く東という人物がおり、彼はいつも若い部員に「癩」の労苦を説教している。しかしある時、短期の療養で退園する新入りの部員の小内が、「癩の苦悩など信じない」と東への同情を拒否する。東はそれ以後、自らの状況に対し何か漠然とした不満を感じるようになっていく。ある日、歌人で評論家の斎田瀏による慰

¹⁴ 『山桜』昭和5年7月号 p.1

¹⁵ 昭和14年2月には、癩予防協会が主催して、文学者、出版社らを招いた「癩文学座談会」が催されている。出席者：(主催側) 厚生省高野予防局長、勝俣予防課長、石橋技師(癩療養所側) 光田愛生園長、林全生病院長、古見泉樂院長、中條北部保養院長、(来賓側) 下村海南、太田正雄、阿部知二、小林秀雄、本田一杉、氏家信、斉藤俳小星、横田忠郎、後藤安太郎、中央公論、文藝春秋社、新女苑

問講演¹⁶があり、斎田は聴衆に「あなたたちがここにこうして病を養って居られることも、これも、君に対し奉って忠節をつくしているのだ」という内容の話をする。しかしその「慰め」は東の気持ちを癒さず、余計に大きな不満の気持ちが高まる。その時、東はそのような「最下級の忠節」ではなく、自分が夢見ているのは、第一級のご奉公をすることなのだと思います。その後、小内に「言い古された癪の苦悩」を拒まれた事件をきっかけに構想をあたためてきた、彼の「夢」を表した詩『御歌』海を渡る日』の創作に入る。詩の内容は、「大東亜共栄圏」内の癪患者を、海を渡って日本の癪患者が「救癪」に行くというものである。そこでは圧倒的な「御歌」への求心が謳われ、当時現実的な話題であった南方へ進軍する「皇軍兵士」の姿を重ねあわせている。その詩は、小内らの前で発表される。詩をよみながら東は小内の反応をととても気にするが、長い朗読を終えて、最後小内は「東がこの南への夢を詩わずにおれぬ気持ち」が尊いと思うとして初めて東に共感を示し、「その夢をうたえるのは日本の、今の癪患者ばかりなんだからな」という一言を残している。

この作品の物語の後半部に象徴的に使われた「作中詩」を中心として、以下に三つの点を挙げて注目してみたい。

①取り込まれた「詩」

この小説の主人公「東」の謳いあげた詩『御歌』一海を渡る日』は、実際に療養所で発表された作品として存在するものである。三井平吉（「林八郎」の別名であろうか）という人物が、昭和17年10月『山桜』文芸特集号「詩部門」で一等（佐藤信重選）をとった作品である。長い引用になるが、小説の後半部、詩が読まれる最後のクライマックスの部分を抜き出してみよう。登場人物の東は、小内が軽快退園するという申し出を聞いた後、戦時下で療養所に平穏に暮す「歯がゆさ」を吐露し、自らの夢であると前置きをして詩の朗読をはじめる。

「俺は、正直な話、軽快退園のできる奴の胸ぐらへとびついて、一杯噛みついてやりたい程口惜しい。そんな話をきくと、自分で自分の咽喉を喰いちぎりたくなる。しかし、小内、怒るなよ。この俺の居ても起ってもおれぬ気持ち、わかってくれるだろう。な。癒える望みは絶対ない。しかし、癪患者としてならば思想も肉体も若くて健康なんだ。それにこの戦争だ。自分のやっていることが歯がゆくて、物足らなくてならないんだよ。俺が今日つくってきた詩も、そういう意味からきた夢なんだよ。その日が来ることを信じなくては生きてゆけない。そういうギリギリ一杯のところからうたったんだ。題は『御歌』海を渡る日。きいてくれ。癪者南へ——なんだ……」

¹⁶ 「慰問講演の軍人・評論家斎田瀏」として描かれているのは、実在の評論家による慰問講演がモデルとなっている。斎藤瀏（陸軍軍人・歌人）の多磨全生園慰問講演（昭和17年6月12日（皇太后陛下御誕辰奉祝記念週間））「万世一系なる天子と、万代不易の国民とがある。これが今度の戦ひの戦勝の最大なる所以であります。（略）このありがたい 皇室に対し奉り、国民が何も感ぜずにゐられようか。（略）上御一人の恩、親の恩に、報ずるなどといふことは出来ぬ。（略）「報」ではなく「奉」である。身も心もぶちこんで差し上げるのであります。これがわが国民精神であります。（略）しからば皆様のごとき境遇に置かれた方はどうすればよいのか。皆様はさぞ御病気を口惜しく思はれてゐることでせうけれども、皆様にとっては皆様がここにかくあるのが最大限の忠義であります。（略）日本の国は澄まねばならぬ。もし皆が自らの逆境をかこち我儘な生活を社会に於て送ることによって、この病が人にうつるとすればその時こそ皆様はくやししくはないか。自分自分を最高に澄ませる、これが皆様の現在の生活でありますから、それがとりも直さず皆様の、国に対する最大の忠義であります。勿論それ以上に、皆様の有る才能で出来ることをやられるのがよろしい。そして、自分は国を純化し浄化してゐるのだ、濁りを澄ませているのだという矜持と誇りをもたれてよいのであります。」（傍線大内）

東はすこし声をふるわせて言ったあと、座り直して原稿用紙をひろげた。

「御歌 海を渡る日
支那に百万
仏印に三万
秦國に五万
ビルマに十万
馬來に三千五百
比律賓一万
東印度諸島二万
しかして印度には百万の同胞がいる。
(中略)
しかし 戦後のもうひとつの戦いは
われわれがひき受けた。
大東亜三百万の癪者は
おなじ血の
おなじ肉の
おなじ病の
俺たちにまかせてもらいたい」

東はそこでしばらく語気をととのえるために息をいれた。読んでいるうちに、東の頭のなかには小さな船が、広い海がそして母や姉の顔が浮かんできた。小内はと見ると、彼は両方の眼を軽く閉じて、心持首をまえに垂れていた。戸川は落つかめ眼をみひらいて、あたりをしきりと眺めまわしている。その両頬はめずらしく紅潮している。東は息を深く吸って朗読をつづけた。

「日章旗の海を渡って行った今
われわれ胡虜に一万五千の『日の丸』の
御旗をかざして
首をながくして待機している。
もし 命ぜられて 許されて
日本の癪者が海を渡る日が来たら
一万五千の一害を送ろう。
(中略)
兵隊が弱魚だけじゃない。
銃後の備えが完全なばかりではない。
誇るべし
日本の癪者には
『御歌』があるのだ。
『御歌』を奉じ
『御歌』の精神を体した
一万五千の使徒達がいるのだ」

東は朗読しながら、それとは遠くへだたった現実を考えていた。日本には三万の癪者がいると言われている。その半数がやっと収容済になっただけである。大東亜の救済、それはたしかに緊切な問題では間違ないが、それは日本の癪者が一人残らず収容されたあかつきでなくてはならぬ。それを、未だ神土に汚穢を

残しているうちに南へ——とは。それはやはり東、おまえの夢だよ。勝ち戦に酔っているんだよ。そう言
ってけなされそうな気がした。小内あたりがきっとそう衝いてくるだろう。そして、この砂のような詩を
冷評して、さっさと病院を出て行ってしまうだろう。東はそんなことを考えながら、ときおり小内の白い
顔を盗み見た。小内は同じ姿勢で書き入っているようだった。

「ああ！
小さな船に
『日の丸』の旗をおしたてて
日本の癪者が海を渡る日は
そう遠くはあるまい。

ああ！ その日
癪者海を征く日こそ
大東亜三百万の同胞が
東方の太陽を
『御歌』を拝する日なのだ！

世界の半数の同胞が
号泣する日なのだ
ああ！ 待ちどおしいぞ。
癪者海をゆく日！
『御歌』海を渡る日！」

声をひそめて「終り」と言った。しばらくの間沈黙がいつた。誰かが身うごきした。東は眼を据えてみた
が、誰なのかよくわからなかった。

「詩もわかるかな。東が、この南への夢を詩わずにはおれぬ気持ちもわかるな。ぼくは、それが導いと思うよ。
南へ…な」

小内はゆっくりとそう言ってから、すこし力をいれて、
「南へ——その夢をうたえるのは日本の、今の癪患者ばかりなんだからな」

なまあたにかも風が部屋の中へと流れこんできた。南の風のおいてくる窓は、小内の背にあった。東のま
むかひに。
(終)

この「東」がうたう『御歌』一海を渡る日は、詩作品としては実際どのような評価を
得ていたであろうか。昭和17年10月『山桜』文芸特集号には、三井平吉氏による「『御歌』
一海を渡る日」が詩部門で一等を取り、選者による評価が載る。選者の佐藤信重は、まず、
「大東亜戦争下初」の文芸特集号だけに非常な期待を持っていたが、それが裏切られなか
ったと喜びを表している。魂が常に前線に立つ詩人が時代の先端に立って、新しい時代の
息吹を伝えていると興奮を隠さない。そして、次のように三井の作品を評している。

一等に選んだ三井君の「御歌海を渡る日」はぐっと光ってゐた。格調の弱々しい部
分もあるが、一篇の雄大な構想と意気とが読む者をしてぐっと惹附ける。日本の癪
者を以って大東亜の癪者を救ふ！そこに「御歌」が大光明を点じつゝ海を渡る……
聖業！作者はぐんと構へてこの精神を微動だもさせないこの作は療養所間に大きい

反響を与へると思ふ。」（傍線大内）¹⁷

日本の「癪者」が「大東亜の癪者」を救うという「聖業」。それが、「御歌」の光明の下に描かれていることに高い評価がされる。また、その一年後に小説の選者となった阿部知二は、集まった作品の総評として「大戦争は諸氏の魂をゆすぶり、多くの作品は直接にまた間接に、いかにして『み民』として生きその分を果たすかといふことを、ひたむきに探り求めようとして居る¹⁸」と論じている。

②太平洋戦争開戦以後の「大東亜癪絶滅」議論

三井の詩と林の小説において、重要なイメージを与えた「大東亜の癪者」への「救癪」という発想であるが、これは、療養所内では現実に議論されていたものだ。昭和16年の太平洋戦争開戦以後、日本の東アジアでの占領地拡大にともなって光田健輔らハンセン病療養所関係者の間では「大東亜共栄圏」内の癪患者撲滅について論議がなされる。恐らく、光田が愛生園の文芸誌「愛生」で論じた記事などが、患者にとって情報源となっていたと考えられる。昭和17年1月の長島愛生園機関紙『愛生』をみると、光田健輔の書いた「大東亜聖戦下に於ける占領地癪問題処理」という文章が載る。

「ボルネオ」「セレベス」「ビルマ」皇軍の向かうところ、頑敵を挫く一面に於て難民中の至難民たる癪の隔離救助に付きて軍部に於て隔離救済の方法を建て、其地方住民を指導せられるに於ては其効果は平時に数倍するものがある。

即ち一人の癪に対する二百坪面積を必要とし南洋に於ては衣食住は簡単にして費用は内地に比すべくもない。其費用は地方の衛生行政の費用より支出せしむべく、或は富豪より醸出せしむるも可なりと考えらる。

斯くの如く癪の如き疾病の処理に就て従来漠然として考えなかった事も処理せられてこそ、聖戦の目的たる八紘一宇の大家族主義に徹底し、一人も其所を得ざるものなからしむる大御心に沿い奉る事となるのである¹⁹。

この時期から、南方への「皇軍」の進出による現地の「癪」の救済は現実味を帯びて語られ始めている。昭和18年7月に厚生省へ提出されたという「大東亜癪絶滅に関する意見書」は、光田健輔ら療養所所長の連名でまとめられたものだ。これは、「海南島に百万の患者を収容したいという計画をたてた…厚生省内でも荒唐無稽な案として一笑にふせられたとされる²⁰」と見られているが、当時の患者や療養所関係者内では深刻に語られていた面も見逃すことはできない。

③「御歌」と国民化の問題

先にも触れたが、この、「つれづれの友となりても慰めよ 行くこと難きわれにかはりて」という歌は、1932年大宮御所での歌会にて「癪患者を慰めて」と題して皇太后節子が詠んだもので、戦前・戦後にかけて日本のハンセン病政策におけるシンボルとなってきたものである。この「御歌」は、患者にとって複雑な問題を孕みながら存在していたといわざるをえない。この歌は一体誰に対して詠まれているのかということから再度確認すると、つれづれの友となりても（「癪患者」を）慰めよ

¹⁷ 佐藤信重「選後感想」昭和17年10月『山桜』文芸特集号

¹⁸ 阿部知二「選後感想」昭和18年10月『山桜』文芸特集号 p.45

¹⁹ 光田健輔「大東亜聖戦下に於ける占領地癪問題処理」昭和17年1月『愛生』p.3

²⁰ ハンセン病問題に関する検証会議最終報告書（2005年3月）p.615

行くこと難き（行くことのできない）われ（皇太后節子）に代わりて
と考えることができるだろう。つまり、この歌はもともとハンセン病の「患者」に向けて
ではなく、「救癩」事業に携わる人々にむけて詠まれているものであることがわかる。また、
昭和 16 年 12 月『愛生』に光田が寄せた一文「御恵の日御歌を斉唱し奉りて」に次のよう
に述べられている。

嘗ては御歌は外来の紳士淑女の斉唱に任せ入園者は随喜の聴者であつた其の時代がい
つしかすぎて今日は癩者も一億国民である、大御宝である²¹。

ここで触れられた「癩者も一億国民である」というスローガンが、新たな自己意識とし
て、少なからず、この一連の詩や小説作品に通底していると考えられるのである。小説中
の東は、「戦時下であるにも関わらず、自らが何の奉公もできない」ことに苛立ちを覚え、
「み民」としての自己認識への要求を高めていくように、「大東亜癩絶滅」等の光田健輔ら
の提起した論議に影響を受け、自ら南進する「救癩」の皇軍兵士となる夢をうたうという
ことには、「救癩」の戦士として、つれづれの「御歌」を直に授けられる側への転換が意識
されているだろう。

つまり、小説『南へ—御歌 海を渡る日』は、これに先立って発表され、戦時下にある
「病者」として気高い「み民」としての精神をうたう姿勢を高く評価された三井平吉によ
る詩作品を軸にもち、恐らく、その詩を詠むことにおけるハンセン病患者の心理的記録を
リアリスティックに描こうとしたものである。そしてここには、病者自身の当時の深い自
己嫌悪の問題が、皇恩との結びつきに解決と癒しを求めていく様が描かれる。小説の終わ
りは、東が長々と詩をよみあげるクライマックスをむかえ、それを受けた小内の短い応答
の言葉「南へ——その夢をうたえるのは日本の、今の癩患者ばかりなんだからな」で締め
くくられる。この言葉は、まさに今こそ「皇恩」を得た「癩患者」が何かを成せる時だ
という意味がこめられ、自己肯定と希望に満ちたものだ。しかしながら、反面、それはあく
まで「夢」なのだと小内の言葉は語っている。そこに描かれた精神的高揚において、も
はや実体としての希望は期待されていなかったのかもしれない。

まとめにかえて

以上、戦時中のハンセン病療養所での文芸活動が、「皇恩イデオロギー」の下に行われた「救
癩」のあり方と構造的かつ精神的に直接的影響関係をもっていることを、政策側からの文
芸奨励の言説や、患者による作品を取り上げて概観的ではあるが確認した。4 章で取り上
げた、戦時末期に「皇恩」への報いに目覚める患者の精神的動きが描かれた作品「南へ『御
歌』海を渡る日」でもみられたが、「皇恩」は、社会的に差別・排除される経験をもつ多く
の患者達のアイデンティティとして強固に入りこんでいくものである。そしてそれは、3
章で述べたように、ハンセン病政策を拡大化する中で政策的構造的に取り入れられていっ
たものであることが明白だ。恐らく、本拙論で提示した「皇恩」の問題は、近代日本社会
が生み出してきたマイノリティと彼らの「表現」の問題を考える上で常に中心的課題とな
るべきものであろう。さらに近代日本が人々の「表現」をどう作り出してきたかという問
題にも深刻に入りこむ問題でもあろう。ここでは、さらなる具体的検討を今後の課題と置
き、この序説を締めくくりたい。

²¹ 光田健輔「御恵の日御歌を斉唱し奉りて」昭和 16 年 12 月『愛生』p.1